

リスク，リスク問題とリスク社会

遠 藤 薫

1. はじめに——「リスク」と「リスク社会」

「杞憂」という、かつて日常的に使われてきた言葉がある。『列子（天瑞）』の故事に因む成句である。昔、杞の国の男が、天が崩れ落ちるのではないかと恐れて、夜も眠れず食事も喉を通らなくなった。友人が「天は絶対崩れない」と説いて彼を安心させた。そのように、起こりそうもないことに「無用の心配」をすることを「杞憂」と呼んだのである。

しかし、今日、杞の男の不安は、「杞憂」ではなく隕石落下「リスク」と呼ばれ、評価の対象となるだろう。かつての時代と現代社会とは、「リスク」すなわち「起こりえる危険」に対するこのような態度の違いによって分けられるかもしれない。

近年、さまざまな「リスク」が取りざたされ、「リスク」という言葉は一種の流行語のようでさえある。たとえば、メタボ問題、食品偽装問題、有害サイト問題（ネット規制問題）、不審者問題（監視カメラ問題）などは各々の「リスク」に対する社会的反応といえる。ミクロな問題ばかりでなく、環境問題やパンデミック、金融恐慌、テロリズムのようなマクロな問題も「リスク」の一種である。

なぜこのように「リスク」（への関心）が社会の中心に浮上してきたのか？

「リスク」に関する理論的議論として、四つの次元が考えられる。

第一に、「リスク」(危険への対処)は、人間・社会のサバイバルにとって、最も重要な関心事である。(〈実体〉としての危険、その対応)。

第二に、実体としての「リスク」が人間・社会にとって重大な関心事であることから、社会には、「リスク」をめぐる様々な情報・知識が蓄積・流通している(リスク・コミュニケーション)。

第三に、しかし、「リスク」は本来的に不確実性を身にまとう。その結果、「リスク」をめぐる様々な情報・知識は、社会的構成物であるとともに、社会を構成するものでもある(メディアとしてのリスク)。

第四に、したがって、ある時点における「リスク」をめぐる様々な情報・知識の様態は、時代・社会依存的であると同時に、時代・社会構成的である。ここから、ある時代の社会を「リスク」という鍵概念によって記述することが可能であるかもしれない(たとえばベック『危険社会』など?)。

前記の「なぜこのように「リスク」が社会の中心に浮上してきたのか?」という問は、上記の第四の次元に(とりあえず)該当すると考えられる。この、議論の次元を混乱させたまま、議論を行うと、混乱して不毛な結果しか得られない。にもかかわらず、しばしばそうした混乱が目につくこと(例えば、工学的な立場からのリスク論と社会学的なリスク論とのディスコミュニケーションなど)が、本稿執筆の動機の一つである。

とはいうものの、第四の次元について議論するには、第一～三の次元に関する議論が不可欠である。同時に、第四の視点を欠いた第一～第三の次元の議論は、根拠を欠いた空論となる。

以上を踏まえた上で、あらためて「なぜこのように「リスク」が社会の中心に浮上してきたのか?」という問について考えてみよう。それぞれの次元に応じて、以下のような解答が考えられ得る。

1. 科学技術の高度化によって、リスクの可視化と制御可能化が進んだ
2. 社会の複雑化によって、複合的なリスクが増大した
3. 1と2の自省的相互作用によって、「リスク」をめぐるコミュニケーション（情報）は爆発現象を生じている
4. 上記フィードバックループは、情報科学の発達をその基盤としている。コミュニケーション（情報）の増大のためには、それを許す処理機能や流通・チャネルが不可欠だからである

一方、このようなダイナミズムの背後には、「リスクの政治学」とでも呼ぶべきものが作動していることを見逃すべきではない。すなわち、「リスク」はニュートラルに存在しているわけではない。「リスク」は、それが社会的構成物である以上、人びとの意図的／非意図的コミュニケーションの相互作用として立ち現れてくるものである。

このポリティクスの作動をいかに見極めていくか。それはまさしく、「社会情報」の理論に要請されるミッションであるといえよう。

2. 「リスク」とは何か？

2.1 確率としてのリスク、1回性としてのリスク

「リスク」とは、辞書的には、「望ましくない事柄が起こる可能性」をいう。まさに「天が落ちてくる可能性」もリスクの一種である。当然のことながら、われわれの人生は、様々なリスクに満ちている。不慮の事故に出くわすかもしれないし、突然の病気に襲われるかもしれない。このようなリスクに対処するために、人間社会はさまざまな社会工学的技術を開発してきた。たとえば、「保険」というシステムもその重要な一つである。「リスク」を辞書で引けば、上記の語義と共に「保険の危険率」という説明も示されている。

保険の萌芽的仕組みは、洋の東西を問わず古くから存在した。しかし、今日の保険システムにつながるものは、17世紀末から18世紀にかけて登場し

た。産業革命の進行と共に都市化が進み、村落共同体によるリスクヘッジの代替として需要されたのである。近代的保険は、確率論（「大数の法則」）に依拠している。すなわち、個々の主体にとっては破滅的な事象であっても、多数の集合においてはそのような事象が起こる確率は予測可能であり、損失を平滑化することが可能となるという考え方である。

今日のリスク論につながる議論の先駆は、経済学者のF.K. ナイトだとされる。ナイトは、まさに世界恐慌という破局の時代に先駆けて、『危険・不確実性および利潤（Risk, Uncertainty and Profit）』（1921）を著した。そして、バブル経済と呼ばれた80年代、合理的期待の理論と共に、アロウらによってリスクと不確実性に関する経済学理論が展開された。

ただし、経済学における「リスク」論は、その発生確率が知られていることが前提となっている。だが、現代社会に生きるわれわれにとって、「起こりえる災禍」の発生確率は、すべてわかっているだろうか？ いや、それ以前に、いかなる災禍も、集合的には「確率事象」であったとしても、それを身に受ける個人にとっては「絶対的な運命」である、という事実は、いかなる理論によっても回避されることはないのである。

2.2 リスクと情報・知識

「不確実な未来」に対する対応は、人間にとって万古からの課題であった。

魔術的社会を脱し、近代科学を生み出したのも、「不確実な未来」に対する恐怖であったともいえる。そして近代科学は、さらに進んで「不確実な未来」を明示的に扱う「確率論」や「情報理論」へと展開した。情報理論の先駆であるシャノンは、すでに古典となった“A Mathematical Theory of Communication”, Bell System Technical Journal, 27, pp. 379-423 & 623-656, July & October, 1948において、「情報」を「不確実性の低減」によって定義した。その意味で、リスク問題とはすぐれて「情報」の問題なのである。

「情報」技術であるコンピュータは、世界大戦中に「予測」のためのツールとして開発された。予測の精度を高めるために、コンピュータには、あり

とあらゆる情報が蓄積されるようになった。さらにこの巨大データベースを、壊滅的な攻撃から守るために、コンピュータ同士を接続するネットワークが、そしてネットワーク同士を接続するインターネット技術が開発されたのである。情報技術とは、歴史的には、まさに「リスク」をわれわれの社会から絶対的に追放しようとする意志と信念の営為であった。

2.3 「社会的構成」としてのリスク

「リスク」という言葉が経済学用語として固有の意味を担って用いられてきたにしても、普通に生きている人間にとって「リスク」とは、まさに自らに降りかかってくるかもしれない将来の災禍についての不安である。

文化人類学者のメアリ・ダグラスは、『リスクと文化 (Risk and Culture)』の冒頭で、「われわれは直面しているリスクについて、現在であれ未来であれ、知ることができるのだろうか？ いや、われわれには知り得ない。だが、知っている振りをしなければならない」と言う。そして彼女は今日の「リスク」問題にまつわる三つの特性を指摘する。第一に、西洋において問題に関する意見の不一致が深く広範に存在する。第二に、人によってリスクとして不安を感じる対象が異なる。第三に、知識と行動が連動していない。つまり、何がリスクであるか、リスクはどの程度のものか、それに対してどう対処したらよいか、について本質的な意見の相違があると彼女は言う。

「リスク」がもつこのような曖昧さは、それがそもそも「可能性の評価」の問題であるところから来ている。すなわち、「リスク」がきわめて相対的な「社会的構成」に他ならないことをダグラスは指摘しているのである。

2.4 ルーマンのリスク論

ルーマン (1991) は、リスクを、ファースト・オーダーの観察に関係づけられるリスク／安全安心 (security) と、セカンド・オーダーの観察と関係づけられるリスク／危険 (danger) に分類している (英訳書 p. 22-25)。この区別は重要である。

「ファースト・オーダーの観察」とは、現実世界のなかの「リスク」を特定しようとするものであり、「リスク」と対になる概念は、「リスクが無い状態」としての「安全安心」である。

これに対して、「セカンド・オーダーの観察」とは、リスクをめぐる人々のふるまいや意味構成、意思決定についての「観察」を云う。したがってここにおいては、「リスクが無い状態」は想定されず、対となるのは、その源泉が我々の社会の外部に置かれる「危険」概念ということになる。

2.5 ベックのリスク社会論

「リスク」が社会の中心的課題となる社会を、ベックやギデンスは「リスク社会」として記述した。ベック(1986)によれば「リスク社会(RISKOGESELLSCHAFT, 邦訳者タイトルは『危険社会』)」は次の性質を持つ:

- ・危険は本質的には目に見えないが、因果律にはのっとっている。…危険は知識の中で加工され、…その限りにおいては、社会が自由に定義づけることができる。

- ・近代に伴う危険にあっては遅かれ早かれ、それを創り出すものも、それによって利益を受けるものも危険に曝されるのである。…同時に、危険は、新たな国際的不均等を、…つくり出す。

- ・産業社会は、産業社会によって解き放たれた危険を経済的に利用する。それによって産業社会がさらに危険社会の危険状況と政治の潜在的可能性をもつくり出すのである。

- ・階級や社会や階層社会においては、存在が意識を決定するが、危険状況においては、意識が存在を決定する。知識は新たな政治的意味を獲得する。

- ・危険社会においては、破局的事件のもつ政治の潜在的可能性が少しずつ、そして一挙に出現する。 Beck, 訳書: P. 29-30

「リスク」という言葉が社会学者の間で注目を集めるようになったのは、このベックによる「リスク社会」論に負うところが多い。しかしその一方で、

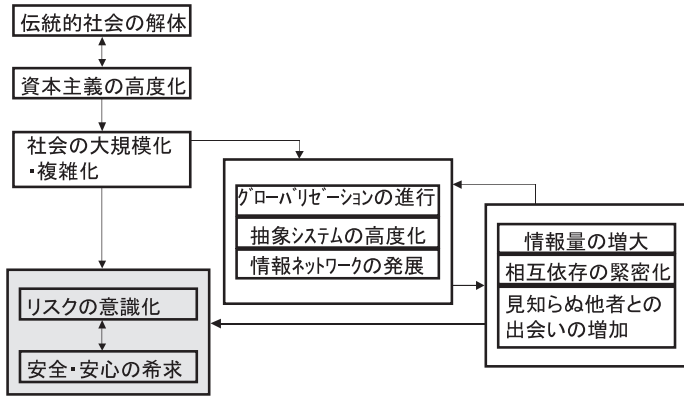


図1 リスク社会化の背景 (遠藤 2004)

ベックの議論については批判も多い。山口 (2002) は、ベックの議論の最大の問題は、「リスク」と「危険」の区別が明確でないことにありと指摘している。

2.6 「リスク社会」とリキッドモダニティ

その意味で、ベックの「リスク社会」論は、「リスク」論であるよりも「後期近代社会」論と重なり合う現実認識であり、社会の複雑化、情報化、グローバル化などの議論と共振する問題意識であるといえる (図1)。

これらとも重なり合う観察を、バウマンは「リキッド・モダニティ (液状化社会)」という鍵概念によって論じている。「リキッド・モダニティ」とは、モダンによって破壊されたかつての秩序や習慣に替わる新たな体制が構築されることのないまま、「そこに生きる人々の行為が、一定の習慣やルーティンへと凝固するより先に、その行為の条件の方が変わってしまうような」(Bauman 2005, 訳書 p. 7) 流動性の高い社会であり、「たえない不確実性の中で生きる」(ibid, p. 8) ことを人々に強いる社会である。移動性や流動性の極限までの追求は、「過去の経験に学ぶ」ことを不可能にただけでなく、ますます大きなリスクにする。

だが、このような状況のなかで改めて「リスク」を考えると、ファース

リスク, リスク問題とリスク社会

ト・オーダーの観察とセカンド・オーダーの観察の区別の重要性を認めた上で、しかし、それらが明確に分離し得るのかという疑いも大きくなる。

3. 「リスク」の時代の違和感

3.1 割れ窓理論

われわれの生活がいか「リスク」に浸されているかは、ニュース報道を一瞥するだけでも明らかである。試みに、2008年9月19日の朝日新聞朝刊を開いてみよう。大きく紙面を割いているのは、「アメリカのサブプライム・ローン問題に端を発した金融不安」「金融不安を一因とする基準地価下落」「事故米の不正転用問題」「新型インフルエンザ問題」などである。それぞれ、金融リスク、食品リスク、疫病リスクなどとカテゴライズされる「リスク」問題群の一部をなしている。

「リスク」の回避をめぐる議論には、しばしばある種の違和感がつきまとう。

たとえば、ニューヨークのジュリアーニ元市長によって有名になった「割れ窓理論 Broken Windows Theory」を考えてみよう。「割れ窓理論」とは、建築物の窓が割れたまま放置されている街では犯罪がおきやすい。なぜなら、割れた窓は、人びとが街の秩序維持に無関心であることを示すサインとなるからである。したがって、窓を割ることを厳罰とし、割れた窓は直ちに修復することによって、結果的に犯罪リスクを減少させる、という主張である。1982年にジョージ・ケリングが発表した論文に由来するものである。

1980年代から90年代にかけて、ニューヨーク市民は、市内の犯罪リスク(治安)がきわめて悪化していると考えられていた。1994年に市長に就任した is installed ジュリアーニは、この犯罪リスクを改善するために、「割れ窓理論」¹⁾に基づいたゼロ・トレランス・ポリシングを採用した。それは、「公

1) George L. Kelling & William H. Sousa, Jr. "Do Police Matter? An Analysis of the Impact of New York City's Police Reforms" Civic Report, No. 22 December 2001

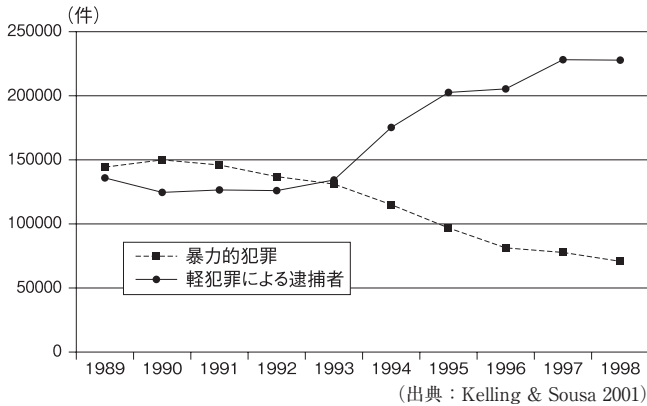


図2 ニューヨーク市の犯罪発生率の推移

共の場での酩酊 (public drunkenness) や、うろつき (loitering)、公共の場での放尿・排便 (publicurination and defecation)、公共物の破壊 (vandalism)、落書き (graffiti)、物乞い (panhandling)、売春 (prostitution)、その他の軽微な犯罪といった、「生活の質」に関わる犯罪や秩序を乱す行為 (disorder) に対して攻撃的に法律を執行することにより、公共の秩序 (public order) を創出しようとするものであった [Harcourt 2001]」²⁾。また、「街頭からの銃器の除去を目指して、NYPD は、攻撃的な停止・捜検 (stop-and-frisk) 10 プログラムを実施した。この政策は、犯罪を考える者たちが、軽微な犯罪や違反で警官に呼び止められる機会が増える以上、銃を携行することを思いとどまるようになるだろうということを、明らかに想定するものであった」³⁾。

ジュリアーニの政策は、成功と賞賛される一方、多くの批判にも曝されている。主な批判点は以下の通りである：

(http://www.manhattan-institute.org/html/cr_22.htm)

- 2) 今野健一・高橋早苗 [2008] 「ニューヨーク市における犯罪の減少と秩序維持ポリシー」『山形大学紀要』 Vol. 38 no. 2 p. 37-58
- 3) 同上

1. ニューヨーク以外の都市でも、この時期、重大犯罪の発生件数は減少傾向にある。
2. 重大犯罪の発生件数は、ジュリアーニの就任以前から観察される。
3. 重大犯罪の現象は、複合的な要因によるものであり、必ずしも、割れ窓理論あるいはゼロ・トレランス・ポライジングにのみよるものとは特定できない。
4. むしろ、マイノリティに対するレイシャル・プロファイリングのリスクが高くなる可能性がある。

3.2 「リスク問題」の同型性

さて、本稿は「割れ窓理論」を検討することを目的とするものではない。本稿では、割れ窓理論に内在する構造的矛盾が、多くのリスク対策に共通することを指摘したい。

たとえば、2008年前半に報道番組を独占していた感のある「食品賞味期限偽装問題」を考えてみよう。老舗料理店が賞味期限を偽って食品を販売していた、という事実を告発された。ただし、そのことによる健康被害は知られていない。すなわちこれは「被害者なき犯罪」であった。また、「犯罪」とはいえ、背反された法としての「賞味期限」は、基準が必ずしも客観的な絶対性をもったものではない。（かつて「賞味期限」などという基準は存在しなかった。食物を摂るものは、自ら食品の安全を判断する以外なかった）。したがって、「行為自体が直接社会的被害を生ずる」というよりは、むしろ「法令遵守」という規範が破られた」というメタ的な論理構成と考えられる。これは、ニューヨークのジュリアーニ市長が提唱して有名になった「割れ窓理論」（建築物の窓が割れたまま放置されている街では犯罪がおきやすい。したがって、窓を割ることを厳罰とし、割れた窓は直ちに修復することによって、結果的に犯罪リスクを減少させる、という主張）とも似ている。この「犯罪」に対する刑事罰がどれだけのものであるか確認していないが、「社会的制裁」は十分すぎるほどのものであった。店主の微妙な表情までが連日テ

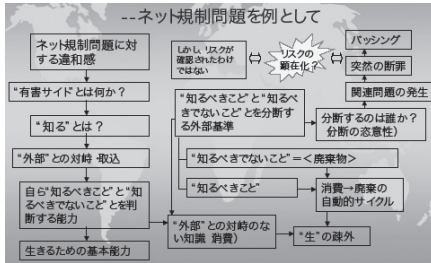


図3 ネット規制問題の動的構造

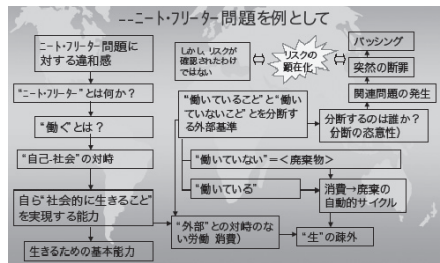


図4 ニート・フリーター問題の動的構造

テレビ画面に映し出され、指弾を受けた。料理店は最終的に閉店することとなった。

このような事件には、いくつかの特徴がある。第一に、被害は必ずしも顕在化していないこと。第二に、「罪」は「法令遵守」概念によって構成され、「被害」によって構成されないこと。第三に、「法令遵守」概念は、基準が絶対的であることを担保しないので、「倫理」概念と結びつき、背反者はその「人格」を批判される。第四に、「倫理」批判にもとづく社会的制裁はしばしばきわめて大きい。こうした特徴は、当初問題となったリスクだけでなく、風評リスクや告発リスクといったメタ的なリスクをも顕在化させていく。

こうしてわれわれの社会は、次々と新たなリスクを再生産し、リスクの予防だけが社会目的であるかのような相貌を呈しはじめている。

3.3 さまざまな「リスク問題」——人的問題への「リスク」枠組みの適用

しかし、このような「リスク」は、従来であれば、「リスク」とは見なされなかった事柄も、「リスク」として問題化される傾向にある。

たとえば、ネット規制問題や、ニート・フリーター問題などである。

「リスク」として問題化される問題に共通する構造は次の通りである。

- 将来起こるかもしれないリスクを予め排除するための規制設定
- 規制されるべき問題の判定基準には曖昧さが含まれる
- 規制遵守が重要であり、基準をみたまないものは〈廃棄〉される

リスク，リスク問題とリスク社会

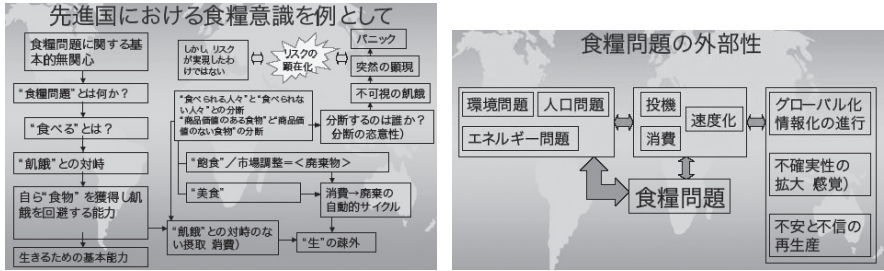


図5 「リスク問題」としての食糧問題

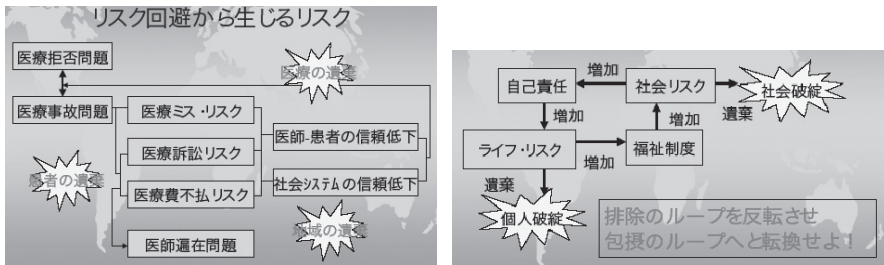


図6 リスク問題の再帰性（医療拒否問題を例として）

□「リスク」は不確実な未来に関する危険であり，現在すでに発生している問題とのプライオリティは曖昧である

3.4 ミクロ問題とマクロ問題の同型性

しかも、「リスク」の枠組みは，さまざまな現象に適用されるというだけでなく，ミクロ・レベルの問題とマクロ・レベルの問題を同じ枠組みで考えるという点でも特徴的である。

たとえば，全世界の将来に関する不安である食糧問題の動的構造を図化してみれば，図5のようになる。これが，既にもてきたミクロ・レベルの問題構造と同型であることは明らかだろう。

3.5 廃棄されるもの——「リスク」の再帰性

「リスク問題」の重大な問題は，「リスク」を回避しようとするれば，その回

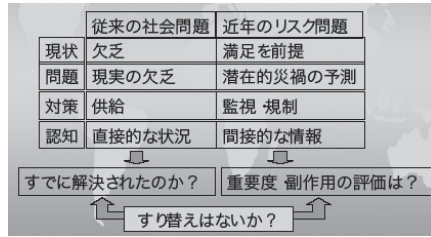


図7 従来の社会問題とリスク問題の違い

避行動が別の「リスク」を生み出すということである。

たとえば、近年日本で大きく取り上げられている「医療リスク問題」（医療拒否問題）は、図6に示すような、相互に関係したリスクが緊密なフィードバックループを構成、作動させたものとみることが出来る。

このようなフィードバックループを止める方策として、もっとも有効なのは、「問題」が「問題」とならないよう、「問題」の発生源をシステムから切り離すことである。ここに、「社会的廃棄」の問題が生ずる。

バウマンは次のように述べている：

「リキッド・モダン社会では、廃棄物処理産業が、リキッド・ライフのやりくり（エコノミー）において支配的な位置を占める。この社会が存続し、そこで生きる人々が幸せに暮らせるかどうかは、製品が迅速に廃棄されるか、廃棄物がスピーディに効率よく除去されるかにかかっている。この社会では、使い捨てが普遍的なルールであり、例外措置はない。（Bauman, 2005, 訳書 p. 10）」

3.6 従来の社会問題とリスク問題の違い

ここで改めて、従来の「社会問題」と今日の「リスク問題」との違いを比較してみたのが、図7である。

ここから明らかに見て取れることは、従来の「社会問題」が現在形であるのに対して、「リスク問題」は未来を現在に繰り込んだ問題であるということである。いいかえれば、想定される未来によって現在を変更する試みであ

るともいえる。

ここで発生するのは、たとえていうなら、SF（サイエンスフィクション）における「タイムマシン」問題である。「タイムマシン」問題とは、「タイムマシンによって過去の世界に行った者は、未来に関して彼／彼女がもっている知識によって過去の出来事に変更を加えてはならない」というルールである。なぜなら、過去に変更が加えられることによって未来が変更されてしまうと、変更前の「未来」に帰属していた「未来から来た者」の存在や知識そのものが揺らいでしまうという、論理的な矛盾が生じるからである。

「リスク問題」も、その「未来」の解析がむしろ精緻になればなるほど、パラドキシカルな混乱を導き出す可能性を増大させる。

3.7 産業としてのリスク問題

こうしたパラドックスの代表例として、現代における金融（工学）への人びとの関心が挙げられる。金融工学は、多様な金融リスクを回避する（リスクヘッジ）手法を高度化し、資金運用の安全性と収益性を二つながら追求することを目指してきた。金融工学は、1970年頃から脚光を浴びはじめ、一時は多くのノーベル経済学賞受賞者を輩出するほどにもてはやされた。だが、その効力は、自らに内在するパラドックスにあえなく崩落した。（9.11で倒壊したツインタワービルのように）。2008年にアメリカで起こった金融破綻の原因も、リスクヘッジの高度化をベースとしたサブプライムローン商品によるといわれる。

ここで問題になるのは、「金融破綻」という出来事ではなく、未来と現在とが相互に入れ子状になった無限鏡像的なパラドックスからなる営為が、まさに現代のグローバル経済を支えており、同時にまさにそれ自身が基幹産業となってわれわれの日々の生活を支えているという点である。

われわれは、ミラーハウスの中にいる。

4. リスク社会と監視社会の双対性——安心・安全のパラドックス

4.1 「安心・安全」社会という問題設定

人間たちは、リスクを何とか制御可能なものとするために営々と努力を続けてきた。多くの科学技術はそのために開発されたといっても過言ではないだろう。しかし、リスクへの対処は、かえってそれ以前には不可視であったリスクを可視化する。また、対処システム自体の不確実性や脆弱性によってもリスクを増大させる。

それだけでなく、リスクは未然の事柄であるため、その予想は、客観性以上に主観性に依存する。社会のなかで、リスクへの関心——とくにその制御の可能性への注目が高まれば、見過ごされてきたリスクも、解決されるべきリスクとして浮上する。したがって、確率論を基礎とする金融工学や、あらゆる情報を考慮のもとにおこうとする情報技術の進展は、リスクに対する恐怖とその制御への社会的関心を相乗的に高めていく。

リスク制御の希求を言い換えたものが「安心・安全社会」である。

しかし、リスクを予防して安心な社会を作ろうとすれば、世界のあらゆる事象を監視し、管理し、未来の不確実性を限りなくゼロに近づけようとすることになる。

こうして、「リスク社会」と「監視社会」は双対問題となる。

今日、監視カメラを拒否することはますます難しくなりつつある。「監視カメラがなくて、犯罪が起こったらどうするのですか？」と詰問されて、「犯罪が起こっても構わない」とは答えられない。また「やましいことがないのなら監視カメラを恐れる必要はない」といわれてしまえば、あらがうことは難しい。プライバシー問題も、情報の保護管理を保証されれば（実は、この情報保護もそれ自体リスクを含んでいるわけだが）、十分な反論とはなり得ない。

この構造の最大の特徴は、「安心・安全社会の希求」が非イデオロギー的

表 信頼社会と安心・安全社会

| | | |
|----|---------|---------|
| | 信頼社会 | 安心・安全社会 |
| 基盤 | 社会的紐帯 | 個人化 |
| 目標 | 持続可能な社会 | 浄化された社会 |
| 手法 | 多様性の許容 | 異物の排除 |
| 前提 | 不完全性の受容 | 完全性の追求 |

で普遍的な願望として措定されていること、監視を望む理由が他者の支配ではなく自らが被害者となることの回避である点である。

4.2 監視カメラに囲まれて

その結果、今日の「監視社会」は、かつてオーウェルが描き出した「ビッグ・ブラザー」に統括される社会とは異なる。フーコーのパノプチコンとも異なる。なぜなら、これらの「監視社会」では、監視する主体が存在しており、監視する者と監視される者とはきっぱりと分別されており、監視される者の恐怖の源泉は監視する者であった。

だが今日、監視する者と監視される者は区別されない。監視する者の恐怖の源泉は、匿名の何者かであるが、それは決して特定されることのない遍在する何者かである。

現在世界最大の利用者数を誇る検索エンジンである Google は、「世界中のあらゆる情報を検索ユーザーに提供する」ことを企業理念として掲げている (<http://www.google.co.jp/corporate/tenthings.html> 2008.9.24)。2008年8月から日本でも Google Map の Street View 機能が使えるようになった(アメリカでは2007年5月から)。Google Map はそれだけでも世界中の地勢情報をまるごと可視化してしまうものである。Street View 機能は、これに加えて、個々の地点の360度パノラマ写真を提供する。いまや、世界中のあらゆる場所を、われわれは居ながら、あたかもその場にいるかのように目撃することができるのである。だが、当然この写真群は、覆面撮影者によって撮影されたものでもある。われわれは、いまや、視るものであると同時に

に視られるものである。

4.3 監視カメラと一体化する個人

安心・安全を自ら確保するために、あるいは単に利便性や興味から、人びとは監視カメラを取り付ける。そして、自分自身が「監視カメラ」と一体化しさえする。

2005年7月に起きたロンドン地下鉄爆弾事件では、ロンドン警視庁はただちにウェブサイトから一般の人びとにむけて目撃情報——とくに携帯電話のカメラに映った映像お提供を求めた。たちどころに多くの現場写真が集まり、早期の犯人逮捕に結びついた。

2008年6月に起こった秋葉原無差別殺傷事件では、歩行者天国を歩いていた多くの人びとがすぐさま携帯カメラを取り出し、テレビのニュース速報にもそうした写真がすぐに使われた。ネット上は、目撃情報であふれかえった。あたかも、事件そのものよりも、その事件に関する情報交換の方が、人びとの意識を惹きつけているかのような光景であった。

4.4 リトル・ビッグ・ブラザー

しかしながら、現代人たちは、単に監視—被監視の網の目に絡め取られているわけでも、単にカメラと一体化しているわけでもない。むしろ積極的に自らを他者の視線にさらすことを望む。リアリティ・テレビの隆盛はその表れといえよう。

自己露出の場としてもっと容易であり、多くの視線を集められる可能性があるのが、ネット上の投稿サイトである。なかでも、「Broadcast Yourself」を標語とするYouTubeは、多種多様な自己映像に満ちている。自己PRを企図している映像もあるが、人気を集めるのはむしろ自らを「笑いもの」として世界に差し出すような者が多い。(本人が意識しているか否かは別として) 自らの犯罪的な行為を投稿して、激しい糾弾を受ける例も多い。

しかし、2007年4月に起きたヴァージニア工科大学銃乱射事件では、犯

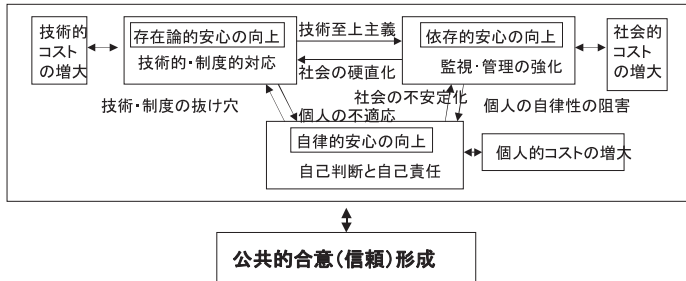


図8 リスクと安心・安全

人はまさに自らの犯行の模様をビデオ撮影し、メディアに送りつけた。それに追従するかのようには、2007年11月のフィンランドの中等高等学校での銃乱射事件、2008年9月のフィンランドの職業訓練学校での銃乱射事件では、いずれも犯行予告ビデオが事前にYouTubeに投稿された。

無差別殺人者のセルフ映像は、見せつけること／見られることによって、辛うじて〈社会〉とのつながりを維持しようとするかのように見える。

彼らは、世界に対して無力感を抱いていると同時にある種の全能感をもって世界を〈監視〉している。その意味で、〈リトル・ビッグ・ブラザー〉とも呼ぶべき存在である。

5. 終わりに——何が隠蔽されているのか？

「危険社会をめぐる知識の発生と普及を研究対象とする社会学理論によって明らかにされ、分析されねばならない」(p. 30) とベックは述べた。ただし、それは、リスク社会の犯人捜しをするためではない。また、リスクと安全・安心の妥協点を見いだすためでもない。

リスク社会において恐怖の源泉となるのは、バウマンも指摘するように、システムから排除されるべきもの／排除されたもの／排除されることである。リスク社会においては、システムの不確実性を増大させるもの（システムの障害となる可能性のあるもの）は排除される必要があり、また排除されたも

のはそのことによってシステムの潜在的敵対者とみなされる。だが、このような恐怖は、まさにその恐怖によって不確実性を増大させる。

こうして、リスク社会はリスク回避（安心／安全の追求）を貫徹しようとするならば、自らの構成メンバーすべてを排除することを最終目的とせざるを得ない。

リスク社会の分析は、このパラドックスおよびその影に隠された不正性を可視化するためになされる必要がある。

【参考文献】

- Bauman, Zygmunt [1991] *Modernity and Ambivalence*, Polity Press Ltd., Cambridge.
- Bauman, Zygmunt [2005] *LIQUID LIFE* (1st edition), Polity Press Ltd., Cambridge. (長谷川啓介訳 [2008. 1. 18] 『リキッド・ライフ——現代における生の諸相』, 大月書店)
- Bauman, Zygmunt [2006] *Liquid Fear*, Polity Press Ltd., Cambridge.
- Beck, Ulrich [1986] *RISIKOGESELLSCHAFT*, Suhrkamp Verlag. (東廉・伊藤美登里訳 [1998. 10. 20] 『危険社会——新しい近代への道』, 法政大学出版局)
- Douglas, Mary [1982] *Risk and Culture*, University of California Press, Berkeley and Los Angeles, California.
- 遠藤薫 [2004] 「ネットワーク社会におけるリスクと信頼——「安心・安全社会」のために」, 『InfoCom REVIEW Vol.35 (2004)』, p. 4-16
- 遠藤薫 [2008] 「リトル〈ビッグ・ブラザー〉たちの共同体」, 遠藤薫 (編著) 『ネットメディアと〈コミュニティ〉形成』, 東京電機大学出版局, p. 33-53.
- 遠藤薫 [2008] 「リスク社会とリキッド・ライフ——自由と安心・安全のパラドックス」, 2008年6月7日, 社会学系コンソーシアム・キックオフ・シンポジウム「社会学・社会福祉学から見る現代と未来」(日本学術会議, 社会学系コンソーシアム共催) 配付資料, 於・日本学術会議講堂
- 遠藤薫 [2008] 「リスク社会と監視社会——安全・安心のパラドックス」, 『学術の動向』(日本学術会議) 2008年11月号, p. 29-34
- Giuliani, Rudolph W. [2002] *LEADERSHIP*, Miramax Books. (楡井浩一訳 [2003. 4. 25] 『リーダーシップ』, 講談社)
- Kelling, George L. & Coles, Catherine M. [1996] *Fixing broken windows : restoring order and reducing crime in our communities*, Miramax Books. (小宮信夫監訳 [2004] 『割れ窓理論による犯罪防止—コミュニティの安全をどう確保するか』, 文化書房博文社)

- Knight, Frank Hyneman [1921=1948] Risk, uncertainty and profit, Hart, Schaffner & Marx. (奥隅榮喜訳 [1959.3] 『危険・不確実性および利潤』, 文雅堂書店)
- 小松丈晃 [2003. 7. 25] 『リスク論のルーマン』, 勁草書房, 東京.
- Luhmann, Niklas [1991] Soziologie des Riskos, Walter de Gruyter. (Translated by Barrett, Rhodes [1993=2008] Risk : A Sociological Theory, New Brunswick, New Jersey).
- 山口節郎 [2002] 『現代社会のゆらぎとリスク』 新曜社
- Wilson, James Q. and George L. Kelling, "Broken Windows: The police and neighborhood safety", The Atlantic Monthly; March 1982; Broken Windows; Volume 249, No. 3; pages 29-38. (ジェームス・ウィルソン, ジョージ・ケリング「割れた窓ガラス—警察と近隣の安全—」日本ガーディアンエンジェルス訳, 小宮信夫監修)